

## 【乳がんの乳房温存術後に対する寡分割照射<sup>かぶんかつしょうしゃ</sup>について】 2020年5月1日

乳がんに対する乳房温存術後の放射線治療には、5週間かけて行う通常分割照射と、3-4週間で終わる寡分割照射という方法があり、米国放射線腫瘍学会のガイドラインでも、通常分割照射と寡分割照射は、治療成績や副作用に関して同等の成績とされています。本文書では通常分割照射と寡分割照射の違いについて、ご説明いたします。

通常分割照射というのは、現在日本で乳房温存術後に対して標準的に行われている方法で、温存乳房全体に **50Gy/25回/5週**（1回あたりの線量は **2Gy**）の照射治療を行うものです。一方、欧米では、カナダやイギリスでの臨床試験の結果をもとに、多くの施設で、1回あたりの線量を増加させ、回数を少なくして治療期間を短縮する寡分割照射が行われています（**40-42.5Gy/15-16回/3-4週**、1回あたりの線量は **2.66Gy**）。

近年、日本でも寡分割照射をする施設が増加しつつあり、日本で行われた臨床試験（JCOG0906）でも、寡分割照射は安全に行えるという報告がされています。保険診療制度上も、2014年の診療報酬改定で、1回の線量が **2.5Gy** 以上の全乳房照射を行った場合は、1回線量増加加算を算定できるようになりました。

これまでのところ通常分割照射と寡分割照射を比較して、治療成績や副作用に差は認められていません。治療成績や副作用に差が無いのであれば、寡分割照射の方が通院の負担が少なくすむと考えられます。

ただし、10年以上の長期的成績に関しては十分でないケースもあります。（抗がん剤をつかった人、若年者など。）寡分割照射の長期的な成績は今後も追っていく必要がありますし、細かな適応の判断については、現状は施設ごとに異なります。担当の放射線治療医にご相談ください。

また、生命保険会社の医療保険の中には **50Gy** 未満の放射線治療に関しては給付金が出ない場合がありますので、（総線量が **50Gy** に満たない）寡分割照射を受けることを検討している患者さんにおいては、事前に保険の契約内容を確認しておくことをおすすめします。